

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 池 俊介 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

1 前 文

新課程（現行学習指導要領）に基づく共通テストが今年度よりスタートした。新課程の目玉ともいえる必修科目の「地理総合」と選択履修科目の「地理探究」とで構成される本試験は、六つの大問で構成されている。各大問は4～6の問いで構成されており、問いは全体で30と前年実施の『地理B』と変化はない。問題の特徴として、地図や統計、模式図や文書資料等が多用されるとともに、長い文章を伴う問いも設定されており、それらを読み取り、理解するのにかなりの時間を費やすことになる。また、選択肢も場合によって長い文章が示されるとともに、選択肢の組合せでの正誤の判断を要する問いが18と多いゆえに、適切なものを吟味するための時間も相当かかることになる。試験時間が60分間で1問2分相当の時間で解答しなければならないために、受験者にとってはかなりの負担であったと考える。このことは平均点が57.48点と、前年の『地理B』の平均点65.74点と比較して大きく下回ったことから明らかといえる。

本試験では、六つの大問のうち、第1問と第2問が地理総合の範囲からの出題で（25点配点）、第3～6問が「地理探究」からの出題となっている（75点配点）。出題内容については、第1問が「食料の生産、消費」、第2問が「地域調査」、第3問が「自然環境と自然災害」、第4問が「エネルギーと産業」、第5問が「産業構造の変化に伴う都市の変容」、第6問が「インド洋とそれを取り巻く地域」となっている。各大問とも「地理総合」、「地理探究」各々の大項目及び中項目の内容が反映されたものになっているが、中には「地理総合」と「地理探究」各々が扱う領域の接点となる内容のものや、同一科目内の二つの大・中項目が融合した内容のものも見られ、総合科目としての地理の性格が反映されたものとなっている。以下、各大問を構成する問いの評価・分析結果について地理教育的観点に立脚した上で言及していきたい。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 「地理総合」の範囲から出題された食料の生産や消費に関する大問で、「国際理解と国際協力」からの出題となる。探究的なプロセスを想定した構成になっておらず、どの問いも複雑な資料を読み解く形式ではないため、受験者にとっては比較的取り組みやすかったと考えられる。

問1 食や健康に関するある指標を判断する問題である。単に国や地域の経済状況を読み取るだけでなく、日本を確認することで解答できる。思考力が問われる場面があまりなく、比較的易しい問題であるが、地球的課題や生活文化の多様性を探る上で基本となる指標を確認させることは重要であり、良問といえる。

問2 ヨーロッパ、西アジア、アフリカにある4地点の自然環境と農業の特徴を比較しながら判断する問題である。地理的な見方・考え方の観点でいえば、「地域の特徴」について、気候や農業の様子を切り口として解答することになり、適切な問題といえる。しかしながら、「地理探究」での学習内容が含まれているため、「地理総合」での出題として適切であったかどうかは疑問に残る。

問3 4か国のコーヒーと茶の1人1日当たり消費量を比較しながら考える問題である。生活文化の観点から、イギリスでは紅茶、イタリアではエスプレッソ、中国ではウーロン茶が嗜まれていること、また、インドネシアではコーヒー豆が栽培されるが、嗜好作物として輸出が中心であることが理解できれば解答できる。難易度も標準的である。

問4 南・東南アジアとヨーロッパについて、イモ類を事例として食品ロスに関する内容を判断する問題である。南・東南アジアのほとんどの地域が高温であり、イモ類の収穫時期が短期ではないことに気付けば解答できるが、少し判断に戸惑う。高温湿潤ゆえに貯蔵段階で腐敗しやすいといった、食品ロスが発生する要因に基づいて作問がなされていない点、更には地球的課題としてグローバルな視点に及んでいない点に対して、改善の余地がある。

第2問 「地理総合」の範囲から出題された愛知県豊橋市に関する地域調査の大問で、中項目の「生活圏の調査と地域の展望」に合致する。従来の地域調査に関する問題では、設問は6問が一般的であったが、今年は大問が増えた影響からか、4問に減少した。そのため、一つの設問に多角的視点を盛り込む出題がなされており、各設問の資料解析をしっかりとさせる意図が感じられた。難易度については、標準的と言える。

問1 豊橋市周辺の新旧地形図を比較して正誤判定をさせる問題。説明文にある下線部に沿って、地図を対比させれば、判定は容易であったと思われる。

問2 豊橋市の製造業の立地特性について正誤を判定させる問題。この設問も、資料を参考にしながら、問いの説明文を読み進めていけば答えは導けたものの、資料2に示されたメッシュの濃淡が判読しにくく、もう少し、表現に工夫が必要だったのではないかな。

問3 東三河地域の農作物の変遷を判定させる問題。聞き取り調査結果の内容、地形の特徴、収穫量の変遷など、多くの資料を読み取らせようという意図が感じられ、良問と言える。

問4 東三河地域と他地域との結びつきを読み取らせる問題。資料1の鉄道や道路の分布図などを参考にしながら、資料を総合的に活用し、隣県との関係性を見極められれば、解答は容易だったと思われる。

第3問 世界の自然環境と自然災害に関する大問で、「地理探究」の中項目「自然環境」の範囲から出題されているものの、「地理総合」の中項目「自然環境と防災」とも関わる。学習指導要領においては、場所や人間と自然環境との相互依存関係などに着目して、自然環境に関する空間的な規則性や傾向性について学習することが求められており、学習指導要領に沿った形で出題されたと言える。主として知識を問う問題と思考力を問う問題とのバランスも良く、試作問題と比較して受験者への負担は軽減されたと言える。

問1 正規化植生指数を示した図1が4地域のどれに当てはまるのかについて問われた問題である。正規化植生指数という教科書等には記載されていない初見の資料に関して、世界の気候や地形の分布の知識や概念を用いて考察する必要がある。気候と地形の両方の知識や概念を用いて思考させる良問であると言える。

問2 ナミビア、ネパール、フィリピンの最高標高地点周辺の起伏陰影図とそこで見られる地形の説明文とを選択する問題である。どの国にどの地形があるのかという知識と、その地形の特徴の知識を問うている。知識どうしを結びつけて解答する問題である。

問3 エルニーニョ現象発生時の海面水温の平年値との差を示した図と南アメリカ大陸西岸を流れるペルー海流の流向を問われた問題である。エルニーニョ現象のメカニズムや地域に与える影響は問われていないことから、エルニーニョ現象時は南アメリカ大陸西岸の海面水温が平年よりも高いという知識とペルー海流の流向の知識のみで解答できる問題である。

問4 アメリカ合衆国、タイ、バングラデシュの浸水による延べ被災者数と総被害額について

問われた問題である。3か国の経済発展の度合いと、先進国ほど総被害額が大きく、発展途上国ほど延べ被災者数が多いという自然災害の現れ方の違いの概念を用いて考察させており、思考力を働かせる良問である。

問5 北半球と南半球における緯度30～40度と80～90度における上昇気温別面積割合について問われた問題である。世界の大陸分布の知識と、リード文に示されている「海氷に覆われた海は日射を反射するため、海氷面積の増減は気温上昇に影響を与える」という考え方をを用いて考察させる問題である。レベルの高い思考が求められており、難易度は高いが「地理探究」に相応しい良問であると言える。

問6 GISでの重ね合わせを体験して、情報を地図上で重ね合わせることで何がわかるかについて問われた問題である。地図に情報を重ね合わせて何がわかるかという技能と論理的な思考力を問う良問であると言えるが、内容的には地図やGISを学習内容の中項目として扱う「地理総合」での出題がより相応しいと感じた。

第4問 エネルギーと資源に関する大問で、「地理探究」の中項目「資源、産業」の範囲から出題されている。「地理探究」では空間的な規則性、傾向性、現状と要因、取組の理解と多面的・多角的な考察が求められているが、本問では規則性と傾向性、現状に焦点を当て、各問いでは一つの資料からしっかり読み取らせ、考えさせようとしている。基本的な知識が問われているものが多く、難易度は標準的であると言える。

問1 主要国の発電量の内訳の変化に関する問いである。出題されている日本、中国、ドイツの発電量の内訳の変化を図示した教科書も見られるが、この問いでは、原子力発電と火力発電の減少に着目させようとしている。ドイツでは再生可能エネルギーの割合の増加が大きいことに気づくことができれば解答は容易である。難易度は標準的である。

問2 ウェーバーの工業立地論に関する問いである。醤油製造、石油精製、ワイン製造を取り上げ、原料指数を用いて区分することを求めているが、製造過程で重量がどう変化するかを資料から思考・判断できるかが問われている。解答するまでにやや時間を要する。

問3 繊維・衣服に関する製造品出荷額、卸売販売額、小売販売額を示した地図をもとに思考・判断する問いである。日本における卸売業と小売業の都道府県別年間商品販売額を図示した教科書があり、卸売業は東京都・大阪府・愛知県で多く、小売業はそれらに神奈川県など関東地方の県が加わり、七地方区分の中心となる都道府県で多いことが読み取れる。そのことに気づくことができれば解答は容易である。ただし、繊維・衣服の製造品出荷額については、わが国の繊維工業に関する教科書の記述が少なく、図の読み取りは難しいと考える。難易度は標準的である。

問4 主要国の国際観光収入に関する問いである。教科書にも図示されているが、国際観光収入と支出の多い国、日本の位置などを考慮して解答すると考える。インバウンドよりアウトバウンドの大きいものが正答となる。難易度は標準的である。

問5 ファブレス企業の特徴と現状について、図を参照しながら文章中の下線部の正誤を判断する問いである。ファブレス企業は、教科書に述べられ、中国に生産施設を置いた台湾企業を紹介している教科書や、サプライチェーンで国際分業を図示した教科書があり、それらに気づくことができれば解答可能である。難易度は標準的である。

問6 各国の貿易と工業の特色を踏まえ、主要国の貿易収支を指数化した値から思考・判断する問いである。貿易赤字が拡大しているアメリカと、日本及び中国の最終財、日本と中国の工業生産の特色を踏まえて解答すると考える。難易度は標準的である。

第5問 産業構造の変化に伴う都市の変容に関する大問で、「地理探究」の中項目「資源、産業」

並びに「人口、都市・村落」の範囲から出題されている。全小問が基本的な知識と図表を用いて思考する問いとなっている。日本の都市の変容について産業構造の変化と関連させる視点で出題されている。この大問では、基本的な知識が問われているものが多く、難易度は標準的と言える。

問1 日本における工業用地の移り変わりに関する問いである。高度経済成長や石油危機など、変化の背景にある具体的な出来事を押さえておくことが求められる。加工組立工業や基礎素材型工業などの抽象的な用語で戸惑った受験者もいたかもしれないが、地方圏や臨海部といった場所の立地が解答のヒントとなる。標準的な問いである。

問2 日本の首都圏の人口ピラミッドに関する問いである。老年人口や生産年齢人口の割合の高さから1990年か2015年かは特定できる。また、1980年代半ばからニュータウンの開発が進んだ都心から約40kmの位置にある場所の高齢化が進んでいること、2000年代以降に建設されたマンションには生産年齢人口が多いということを人口ピラミッドと関連させて判断すれば解答できる。標準的な問いである。

問3 イタリア、オーストラリア、韓国の産業構造の変化と都市人口に関する問いである。それぞれ特色ある3か国について、都市人口率とGDPに占める製造業の割合について、各国の特徴を押さえておけば解答は容易である。イタリアとオーストラリアの都市人口率で解答に若干時間を要する。オーストラリアの都市人口率の高さは、自然条件との関連で押さえておきたい。標準的な問いである。

問4 日本（東京都と全国）の情報関連産業に関する問いである。出版業、新聞業、ソフトウェア業の業種の特徴を踏まえた上で、全国の従業者数に占める東京都の割合と全国の従業者数の増減率から、三つの業種を特定していく。基本的な問いである。

問5 ロンドンに関する主題図の読み取りに関する問いである。ロンドンシティの3枚の主題図をもとに、会話文の正誤を判別する。複数の地図から得られる情報を重ね合わせて判断するので、内容は基本的であるが解答に若干時間を要する。

第6問 インド洋沿岸地域に関する大問である。「地理探究」の大項目「現代世界の地誌的考察」に該当し、今回はインド洋沿岸地域の自然環境、文化、産業や地域内でのつながりなどから出題されている。資料の読解に時間を要する問題が少なく、基本的な知識を活用する問いが多いため、難易度はやや易しいと言える。

問1 インド洋沿岸地域でのサイクロンの上陸頻度に関する問題である。熱帯低気圧の発生する緯度帯が理解できていれば、解答が結びつきやすく、示されている地図も広範囲であるため、基本的知識を反映した問題であると言える。

問2 インド洋沿岸地域での稲作を行う際の灌漑の活用に関する問題である。問1同様に気候帯、緯度帯が理解できていれば、解答に結びつきやすい。特にインダス川流域は降水量が少なく、灌漑が用いられていることは、基本的知識と考えられるため、平易な問題と言える。

問3 アラブ首長国連邦、インドネシア、シンガポールの国家間の輸出額と移民数を示した図から、国家間の関係性に関する問題である。工業化の度合い、建設労働者の移民など複数の要素から解答を導き出す必要があり、思考力と判断力が問われる。解答するまでに時間を要する良問と言える。

問4 インド、ミャンマー、タンザニアの宗教と歴史、時事問題に関する問題である。宗教がベースとなっているが、植民地時代の歴史やロヒンギャ問題など現代の問題まで幅広い知識を使うため、思考力と判断力が問われる。また日頃から、地図を用いた取り組みを行っているかを問うことができる良問と言える。

問5 モーリシャスとモルディブの植民時代からの国家形成に関する問題である。両国とも深く扱われることが少ない国であり、高校生にとってはなじみが薄いことが考えられる。モーリシャスのhindoo教徒の割合が高いことから、インドとの共通点を見出し、イギリスとの関係まで結びつけることは、難しいと考えられる。気候と作物、地球温暖化問題、一帯一路構想の知識から消去法で解くにしても、受験者にとっては厳しい問題だったと言える。

3 総評・まとめ

前述したように、本年度の平均点は昨年度と比較して大幅に下がったものの、全体的な難易度については、教科書で扱われている学習内容を逸脱することなく、知識・概念を手掛かりに思考、判断のプロセスを追認するための情報処理能力（考察力、分析力、解釈力等）が試されるものとなっている。いわば、新課程の求める資質・能力の主軸として位置付けられる「知識・技能」「思考・判断」が重視された共通テストに相応しい標準的なレベルの問題であったと言える。一方で、制限時間が短い中での解答が要求されているゆえに、資料や問いの数を若干少なくしたり、文章をもう少し短くしたりするなど受験者の負担を考慮に入れた対策を考えていく必要があるだろう。

総じて、本試験では多くの問いに見られたように、地図や統計、写真をはじめとする様々な資料から地理情報を読み取るためのスキルが重視されている。ゆえに、高校現場においては、探究プロセスを重視した授業を今後更に心がけていく必要がある。すなわち、「知識・技能」をベースに「思考・判断」の過程を踏まえた地理的な見方・考え方の育成を重視した授業づくりが望まれる。

4 今後の共通テストへの要望

新課程に基づく最初の共通テストとなった今回の本試験は、教科書を中心に基礎的事項を学習し、地図帳で世界の概観を押さえ、資料集や統計データ等を用いて様々な種類の図表を読み取るためのトレーニングを地道に積み重ねた者にとっては、十分解答可能なレベルであったと考える。これに加えて、「知識・技能」をベースにしながら「思考・判断」の定着度を問う問題形式であったことから、『地理総合、地理探究』に相応しい問題であったと解釈できる。一方で、新課程の目玉でもある「課題の発見→要因の分析→解決策の構想」という探究プロセスを意識した大問構成や問いについては決して多いとは言えず、問題作成に当たっての今後の課題と言える。

上述したことを踏まえ、授業を含め日頃の学習で養われた物事に対する探究心と知的好奇心を大切にするとともに、「主体的・対話的で深い学び」の成果として身につけた地理的な見方・考え方を、日常生活の様々な場面に生かすなど、地道にかつ丹念に学習に取り組んだ受験者の成果が最大限に発揮されるような「良問」の出題を今後も期待したい。

② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

T E L 03-5802-0201

1 前 文

平均点は『地理総合、地理探究』で 57.48 点、「地理総合」で 43.5 点(100 点満点換算)であり、単純比較できないものの、昨年度の『地理B』の 65.74 点とは－8.26 点、『地理A』の 55.75 点とは－12.25 点と難化した。共通テストへ移行して 5 年目、新課程初年度ということもあって世間の注目度も高い中、高等学校までの学習内容に沿った問いが圧倒的に多く、学習範囲を逸脱した難問や奇問は、本年度も見られなかった。参照すべき資料は多かったものの、試作問題と比べ精選された印象が強い。大きな傾向変化がなかったという点で受験者も安心して取り組めたのではないかな。

2 試験問題の程度・設問数・形式等への評価

2022 年に公表された試作問題では、第 1 問「地球的課題(難民)」、第 2 問「自然環境と防災」、第 3 問「自然環境」、第 4 問「産業」、第 5 問「地誌(アフリカ)」、第 6 問「X 市のまちづくり」であった。本試験では第 1 問「地球的課題(食料問題)」、第 2 問「地域調査(愛知県東三河地域)」、第 3 問「自然環境」、第 4 問「産業」、第 5 問「都市」、第 6 問「地誌(インド洋)」であり、基本的な枠組みは相違なかったが、旧課程『地理B』に近い印象も受けた。試作問題では第 6 問が地域調査の形をとり、「持続可能な国土像」についても出題するなど、課題解決に向けて構想する力を問うものも見られたが、新課程初年度の『地理総合、地理探究』では、そうした問いが見られなかったのは残念である。

旧課程『地理B』に引き続き、『地理総合、地理探究』においても図や写真、グラフ、表などの資料が豊富で、組合せ選択の問いは昨年度の『地理B』よりもやや多い 18 問を数え、解答数の 6 割に達し、解答に多くの時間を要した。四つの文または下線部の中から適当あるいは不適当なものを一つ選ぶものは 6 問と少なかったが、各下線部の正誤をそれぞれに求めるものも 1 問見られた。詳細な知識を問うものではなく、大多数が基本的な知識が身に付いていれば解答可能であった。また、基礎的な知識理解をもとに資料と照らし合わせ思考判断し、更に二つの事項について組み合わせるような問いが多かった。これらを総合すると、新課程初年度を意識して作り込み過ぎたと思われるような問いは少なく、必要とする知識は少なかったが、正解率が予想したより高くはならなかった問いが多かったと思われる。

第 1 問 「食料の生産や消費」 試作問題では難民をタイトルに問われた「地球的課題と国際協力」の大問が、食料問題について問われた。問数が少ない中で、食料に関する様々な内容について問われており、今後のモデルとなるような大問と考えられる。難易度は抑えられた印象で、受験者が最初に接する「地理総合」と『地理総合、地理探究』との共通問題の第 1 問として相応しい大問であったと思われる。

問 1 統計地図が示す指標を選択する易問かつシンプルな作りの問い。選択肢の中で正解となる穀物の輸入依存度だけは、先進国と発展途上国との明確な対比が見られないものであるという点は示唆的だった。正解以外の指標を同じように地図化した際、それぞれの判別は難しいと思われることについては改善点か。

問 2 4 地点における自然環境と農業についての易問。自然環境だけ、農業だけを問うのではなく、それぞれの関連性を踏まえながら正誤を判断することが求められると同時に、気候と

土壌、農業地域の空間的な広がりも含めて考える問いとして評価したい。一方で、アの説明に用いられた「降水量の季節変化が少ない冷涼な気候」の部分は亜寒帯湿潤気候を思わせるもので、「肥沃な土壌をいかして小麦などが栽培されている」はステップ気候を思わせるものという点については迷いを生じさせたのではないかと評価できる。

問3 4か国の茶とコーヒーの消費量に関する標準的な難易度の問い。イギリスの嗜好品が茶であるという知識を必要としたものの、日本とその他の4か国の傾向の違いはよく表れていた。1人当たり消費量が先進国ほど多くなることでイギリスと中国を判別させる、考えられた問いである。

問4 食品ロスに関する易問。高温湿潤地域でのイモ類の収穫時期が誤っており、公民的になりがちな食品ロスというテーマを、生産から消費の段階までの地域間差異で見せたという点で評価できる。

第2問 「愛知県東三河地域の地域調査」「生活圏の調査と地域の展望」からの出題。地形図・地理院地図を含めた様々な資料を読み取りながら思考・判断していく構成は、旧課程の地域調査の大問と同様であった。そうした中で、問3、問4のように、取り上げられた地域に関する知識ではなく、これまでに学習した系統地理的な学習から判断し解答する問いが作成された点は、評価したい。また、地域調査に関する大問はこれまで、各問それぞれに多数の資料が用意され、それらの資料を読み取り判断するに当たって時間を要するものが多かった。しかし、「地理総合」と『地理総合、地理探究』の共通の大問に地域調査の大問が当てられたことで、問数が4問となり、解答時間への圧迫が少なくなった点も評価できる。

問1 新旧地形図の読み取りに関する標準的な問い。読図の問題として基本的ながらも評価したい。国道1号線に関する2地点の標高差は、水準点などの数値から読み取れたが、等高線から読み取って判断するという方法でも良かったか。

問2 提示された生徒作成の資料を読み取って下線部の正誤を判断する易問。資料を丁寧に読み取れば正解でき、資料の量や複雑さ、会話文の量や複雑さは適度であった。

問3 三つの作物の収穫量の変化について示された統計地図から、それぞれの作物を判別する問い。用水の開通が米の収穫量増加につながったと考え、誤答となってしまった受験者もいたのではないかと予想する。聞き取り調査結果の具体性を上げ、もう少し変容前後の東三河地域の農業を想起しやすい内容にしても良かったか。

問4 東三河地域と静岡・長野両県との旅客移動の大小と移動手段の特色を、大阪府との移動を参考に判断する問い。同じく太平洋ベルトに位置する静岡県とのつながりの方が強いことや、遠距離の大阪府と比べ静岡・長野両県との移動では、自動車の利用割合が高いことを資料から読み取り判断することが求められた。交通網を表した資料1に返って考える方法もあったか。工夫された問いと評価したい。

第3問 「世界の自然環境と自然災害」 自然環境の大問において、世界図が問1だけではあったが出題された。世界図を用いながら世界を大観させ考察させるような問いが作成されたことは評価したい。また旧課程『地理B』の自然環境の大問では、センター試験時代も含め、自然環境そのものの理解に留まる問いが多く、自然環境と人間生活との関連にまで踏み込んだものの出題は少なかった。自然環境と人間生活とのつながりが、災害や防災面でのつながりに傾きがちであり、地理において地形や気候を学習する意味を考えれば、人間生活との関連にまで踏み込んだ問いを期待したい。全体的に難易度が高い大問となっており、昨年度の『地理B』に比べ平均点が低下した要因と考えられる。

問1 2地点間の正規化植生指数が表された初見の資料を、それが何を示すのか考えながら解

く、新課程の共通テストに相応しいが、やや難易度の高い問題。正規化植生指数が砂漠や高山で低く、温暖湿潤な地域で高くなることを冷静に読み解けたか。AとBは、地形的要素も踏まえないと判断できないなど、気候と植生、地形の総合力が試された。

問2 陰影起伏図と各国の最高標高地点周辺の地形との組合せ選択の問い。風化地域は起伏が小さいこと、山岳氷河による侵食で多数の谷が形成されること、火山地域に火口のくぼみが見られることなどを図と文から読み取れば正解を得られた。工夫された問いであるとは感じるが、イメージしにくいナミビアについても取り上げられたこともあり、難易度は高い。

問3 エルニーニョ現象とラニーニャ現象に関する問いで、知識で解ける安心感があるという意見と、資料の読み取りを通じてどのような条件下で各現象が生じるのかなどを考えさせる問い方もあったのではないかなど、意見は分かれた。

問4 自然災害における被災者数と総被害額の国による相違に関する問い。経済的水準による防災施設の整備状況の違いを考察するもので、日本を手掛かりに、数に対する被害額を判断できたか。標準的な難易度。

問5 地球温暖化に関するもので、共通テストになってから見られる2要素掛け合わせの問い。問題文にあった「海氷面積の増減が気温上昇に影響を与える」という一文を解釈できたかが鍵だった。水陸の性質の違いや、緯度別の水陸分布をもとに気温上昇の傾向を考える、難易度は高いが根源的なことを問う良問として評価したい。

問6 自然災害への備えについてGISにおけるデータの重ね合わせを題材とした易問。

第4問 「エネルギーと産業」「地理総合」との共通問題で農業が扱われたため、ここでは第二次、第三次産業について出題された。「地理探究」では、第三次産業に関する内容が増加しており、本大問においても第三次産業に関するものが、問3～5において扱われた。全体としての難易度は標準的か。

問1 3か国の電源別発電構成に関する問い。表し方こそ増減率であったが難易度は易。

問2 工業の立地特性を原料指数という初見の数値から問うもの。難易度は標準的だが、原料指数が何なのかや、提示された資料を読み取り、理解するために時間を要する問いであった。一方で、資料中に示された製造過程に注視すれば、思考力・判断力を駆使して正解までたどり着ける能力を測る良問であった。

問3 繊維・衣服の生産流通段階の違いによる分布の特徴に関する問い。それぞれの分布傾向がはっきりしており、シンプルな作りではあるが、統計地図作成の有効性が示された問いでもある。卸売販売額と小売販売額がどのような都道府県で多くなるかを考えられたかが鍵だったか。

問4 4か国の国際観光収支それぞれについて経年変化が問われた。ヨーロッパ内で北から南の国への移動が多いことを踏まえれば、ドイツを答えることは容易だったか。資料としては日本とタイを比較して、観光収支がどのように変化してきたのかや、その背景を考えさせることにも使え、示唆的である。

問5 ファブレス企業について知識があると正解にたどり着きやすかったか。新しい時代の企業経営や流通について考えさせられるファブレス企業を扱ったという点で、新課程の共通テストらしい仕上がりに好感が持てる。

問6 労働集約的な部門における中国の優位性を、3か国における中間財と最終財の貿易収支から問うもの。受験者にとっては見慣れた資料ではなかったかもしれないが、日本とアメリカ合衆国と中国の、国際分業上の立ち位置が表れており、示唆的である。

第5問 「産業構造の変化に伴う都市の変容」 人口都市に関する大問で、産業構造の変化に伴

うという視点には好感が持てる。昨年度『地理B』の同分野の大問に引き続いて、日本と世界からバランスよく出題された。

問1 日本の産業構造の転換とそれに伴う工業立地の変化についての比較的容易な問い。時間軸と空間軸がどちらも用いられている点や、資料がコンパクトにまとまっている点が評価できる。

問2 首都圏の位置の違いによる人口ピラミッドの特徴と変化を問うたもの。四つのピラミッドから二つの地点とそれぞれの時代を判別するだけではなく、2地点については、それぞれの地点の特徴を示した文と組み合わせる形式となっている。共通テストらしい問いとして評価したい。この問いについての難易度は標準的であるが、近年定番となっている2要素掛け合わせの形式は、解答時間を要したり、正解率が下がったりすることもあるため、同じ内容をもう少し簡便な形で問うてもよいのではないかと思われる。

問3 製造業の発展と都市人口率の変化に関する問い。資源大国ではあるが、製造業の割合が低下していったオーストラリアの様子がよく表れているものの、イタリアとオーストラリアはどちらかにし、途上国など、別の傾向で推移してきた国を代替として出題しても良かったか。都市人口率で解く側面があったのも改善点か。

問4 情報関連産業の業種による東京都への集積の相違について問う標準的な難易度の問い。新聞が放送と並んで地方での従業者が比較的多いことや、紙媒体が減少してきたことが従事者数の増減に関係していることを踏まえて判断する。現代の世相が表れている示唆的な資料であった。

問5 ロンドンのグローバル化による都市内の地域格差に関するもので、正しく資料が読み取れば正解できる。難易度は低い。

第6問 「インド洋とそれをとりまく地域」 環インド洋という広範囲な地域からの出題となった。共通テストへの移行後、地誌に関する大問が2大問から1大問となったことや、新課程の学習指導要領において「様々な規模の地域」を取り上げることが求められている影響もあって対象範囲が広がった。これを受けて様々な国・地域に関する出題が可能となり、問題の幅も広がったが、第3～5問までの系統的な分野からの出題との差異があまり見られない点は検討いただきたい。難易度は第4問、第5問よりは低く、その要因は、広範囲の地域について比較しながら考察する問いが多かったためと考えられる。

問1 サイクロンの発生と移動に関するもの。赤道では熱帯低気圧が発生しないという知識の有無で正解か不正解かが分かれたか。この地図では緯度が示されていたことに、受験者は是非気づいてほしい。解答に要する時間が短い問いの一つ。

問2 この問いも、解答時間を要しない。インダス川の灌漑による稲作という知識があれば、容易に解答できたか。

問3 4か国間の輸出額と移民数についての問い。インドからアラブ首長国への出稼ぎ労働者についての知識からアラブ首長国は容易に判別できる。一方で、シンガポールとインドネシアの間での輸出額と移民数については、両国間の経済的水準や人口などからの判断が必要で、難易度は高い。アラブ首長国を明らかにして、二つの図のどちらが輸出額か、また図のどちらがシンガポールかを組み合わせで選択する方法もあったか。

問4 3か国の言語や宗教に関する問いで難易度は標準的。インド洋に面するそれぞれの国々で、宗教人口第1位となる宗教は異なるものの、その第1位となる宗教人口割合を示した図3を、国F～Hと文サ～スの組合せを判断するのに生かすというよりは、むしろ3か国の宗教と言語の知識で解くことになった問いだったとの意見もあった。

問5 モーリシャスという受験者にとって馴染みの薄い国が問われたが、正解を得るには旧イギリス領においてヒンドゥー教徒が多数派のインドから移住し、サトウキビのプランテーション労働に従事することが多かったということが判断できれば十分正解でき、難易度は標準的である。一見馴染みの薄い国が出題されても慌てず、提示された資料の中から学習してきたことが使える部分を見抜く目を養う指導を心がけたい。

3 総評・まとめ・要望

新課程初年度ということで注目が集まる中、試作問題から更に資料数や問い方が精選された形での本試験であった。一方で、昨年度と比べて平均点の低下が物語っているように、手ごたえに対して得点が伴わなかった受験者がいたのではないかと推測する。『地理総合、地理探究』においては、少なくとも昨年度旧課程『地理B』並み、「地理総合」についても昨年度『地理A』並みの点数が得られるよう、調整をお願いしたい。

完全解答が求められる6択問題では、一つは正解できても、残りの二つを逆に捉えてしまったがために不正解となるため、正答率の低かった問いを分析し、思考判断の手掛かりを加えるなどの工夫をお願いしたい。資料数や問い方が精選されたことで、いたずらに解答時間がかかる問いは見られなかったが、受験者にとって初見となるような資料や用語については、それそのものの理解に時間を要しなくてもよいような改善を願う。

提示された資料の中には、そのまま授業でも用いられるような、様々な展開の仕方が考えられる示唆的なものも見られた。今後も地球上の様々な事象に対して、地理的見方・考え方を養い、事象の意味や将来像を自然と想起してしまうような、現場の教員の手本となる作問を求めたい。